P1-078

神奈川県西部の足柄上地域における乳幼児健診担当医師確保を目指した現況調査

青木 理加¹、伊藤 秀一²¹神奈川県立足柄上病院小児科、²横浜市立大学大学院医学研究科発生小児医療学

【目的】

小児科医が少ない少子化地域において乳幼児健診（集団）のシステムを維持していくために自治体と健診担当医へのアンケート調査により現状と課題を明らかにする。

【研究方法】

神奈川県西部の僻地の足柄上地域の 6 自治体と 19 名の健診担当医を対象に乳幼児健診の現況について各々 2021 年秋に調査票を送付し回答を得た。自治体への質問では、実施する健診種、回数、年間対象者数（2020 年度）、3 年以内の医師確保困難の状況有無、小児科医による健診の希望の有無と理由、健診事業で困っていること等を選択式、あるいは自由記載とした。健診担当医師への質問では、協力する健診種と自治体名・回数、自身の専門科、年代（10 歳毎）、自施設での乳幼児診療状況、予防接種等の小児保健への協力状況等を選択式で質問した。また、乳幼児健診の研修機会（コロナ以前）、健診業務の負担感とその理由、域内・近隣圏の小児科医に望む支援を選択式で質問し、健診システムの問題点や解決法の提案を自由記載してもらった。

【結果】

全自治体と 18 名の健診担当医（回答率 94.7%）より回答を得た。4 自治体で過去 3 年以内（2021 年度分まで）に担当医の決定に難航する状況があった。自治体は健診担当医に小児科医を強く望む（4 つ）かどちらかといえば望み（2 つ）、その理由に「小児科医としての視点を期待するから」（4 つ）を挙げている。課題として、「医師により健診の質が一定しない」（4 つ）、「医師が小児科医でないときに相談のしにくさ」（3 つ）を挙げている。健診担当医調査では小児科を専門としない医師が 61%であり、未就学児を診療する機会が「あまりない」、「ほとんどない」が合わせて 50%、「未就学児に予防接種する機会が無い」は 22%であった。健診業務の負担感は 44%が「ある」と回答し、非小児科医師では専門外であることによる不安を、小児科医では回数の多さと拘束時間の長さによる減収を挙げている。域内・近隣圏の小児科医に望む支援として、61%が「健診そのものへの参画」を希望し、28%が「研修への協力・精査時の協力」を挙げている。

【考察】

少子化地域において小児科を専門としない医師が乳幼児健診を担当する状況が明らかとなった。小児科医が全ての健診を担えない地域では健診担当医師を支援する方策が必要となり、小児科医には広域的な人的支援や研修支援などの役割が求められる。

P1-079

FaceReader™を用いた児童養護施設入所児童への動物介在(イヌ)の即時的な影響—学童期の子どもを対象に—

柚山 香世子¹、井上 映子¹、志賀 亮太¹、
樺島 稔¹、後藤 武¹、林 賢一²¹城西国際大学、²ソエティス・ジャパン株式会社

【目的】

複雑な家庭環境や被虐待、発達障害の影響等の背景を持ち、心理的側面への支援が必要とされる児童養護施設に入所する児童を対象に、イヌの動物介在を行い、即時的な影響を明らかにした。子どもは言語表現が拙いことから、客観的評価として表情から感情を読み取る FaceReader™を用いた。

【方法】

施設長と知的能力障害やイヌへのアレルギーのない子どもの双方に同意が得られた 1～6 年生の対象者 21 名を 2 グループに分け、評価は介入前 2 回と 1 回 40 分間の動物介在前後を 2 週間隔で計 6 回実施した。指標には①唾液アミラーゼ活性値(以下、唾液アミラーゼ)、②血圧、③脈拍、④ビデオ撮影した表情を FaceReader™ version 7.1 (以下、FaceReader™) で解析した感情を用いた。解析には「R」を使用し、各指標において通常生活における平均値を基準値とし、各回の介入前と後の各々の変化率を算出した。また各回の介入前後の各々の平均値(標準誤差)を基準値と多重比較した。本研究は、城西国際大学研究倫理審査委員会の承認(17K2100061H)を得て実施した。

【結果及び考察】

対象者は計 21 名(男子 12 名:女子 9 名)であり、全員は何らかの虐待を受けた経験を有した。脈拍と血圧(収縮期)は、全介入回で介入後の変化率が介入前より低値であり、血圧(拡張期)は 2～5 回で同様に低値であった。唾液アミラーゼは介入回によりバラツキがあった。各介入前と後の基準値との比較では脈拍、血圧(収縮期、拡張期)は介入回にバラツキがあり、唾液アミラーゼは全回有意な差がなかった。これらからイヌの動物介在は、施設学童期の子どもにストレスを与えず、即時的にリラックス効果を与えたと示唆される。表情解析では、「Neutral」スコアが他の感情と比べ介入前後共に高く、「Sad」の変化率は有意に高値(5 回目、 $p < .05$)でありスコアも介入前後は増加傾向($p < .10$)にあった。心的外傷後ストレス障害のスコアが高いほど「Neutral」の割合が有意に高くなる(Fujiwara et al., 2015)ことから、対象者の被虐待の経験が感情麻痺による外部刺激への反応性を低下させたためと考えられる。また「Neutral」「Sad」の変化は、Therapy dog との触れ合いにより感情が徐々に解放された結果と推察する。